

絵本で命の大切さ、 素晴らしいことを伝える

片岡 今月の右脳インタビューは志茂田景樹さんです。それではご足跡をお伺いしながらインタビューを始めたいと思います。

志茂田 大学を出て、最初は営業畑の仕事、次いで探偵社や興信所、そして生命保険の調査員になりました。生保が調査するのは生命保険に入ってから2か月以内に死亡した短期死亡というものです。

保険に入っている人は、全国どんな山奥にも、岬の果てもいって、その多くは観光地でもなんでもないので、だのうんとへんびな場所です。そんなところにも調査に行くのですが、それが何となく新鮮で、日本にはこんなところがまだあったのか。日本を細かく見てい

る感じですが、仕事でなければ絶対に行くことはなかったですね。

ていうという自覚があったからだと思います。普通7年間もかかるので、多くは諦めてしまおうと。苦勞してお蔭で、受賞後1年間で作家専業となり、4年後に直木賞を受賞しました。

またフアンションにも関心があり、山本寛斎のフアンションショーにも出たり、デザインナイズブランドも着ていましたが、そのうち権威を着ているのだ、着せられているのだという意識が強くなってきました。

作家です。官仕えの人よりも自分を解放できまして。自分が心地好い格好をする、それが今のフアンションに繋がっています。しばらくすると僕のフアンションが注目されるようになり、週刊文春が半年間の密着取材でグラビアの大部分を集め、その後、TV

のバラエティー番組のオフアが殺されました。タレントさんは仕事だから...という意識があると思います。僕はバラエティーに出ても普段の自分のまま、仕事と思ったことはありません。

小作家というのは、例えばドドロロした人間模様があれば、それを心にいつかたん詰め込み整理して書く仕事、内側に詰めていく作業です。一方、バラエティーは自分をさらけ出す、全く逆のことをやっているわけですからバランスがとれました。

小説を書いていると、例えば「黄色い牙」には主人公が、猛吹雪の中、山中で遭難しかけている仲間を助けに行くシーンがあるのですが、自分が主人公になり進んでいるつもりで書いて

いますので、はたから見ると僕も苦しそうな顔をしているかと思えます。何行かの描写が、書いても、書いても、気に入らない。それも書く楽しみの一つで、そこ感動があります。

物語の感動を伝え歩く 直木賞作家

絵本作家 児童書作家 小説作家
よい子に読み聞かせ隊長

いまTwitterのフォロワーが24万人を超え、
「心の癒し」を被災地に届ける行脚を続けている志茂田さん。絵本による感動の輪が広がっている。

いまTwitterのフォロワーが24万人を超え、
「心の癒し」を被災地に届ける行脚を続けている志茂田さん。絵本による感動の輪が広がっている。

母にせがんで読んでもらった「三匹の子豚」の読み聞かせは偶然から始まった

でも心地よいものとして刻まれている、どこかでそれがしつかり結びついたものだったと思います。

1998年10月、福岡のリブレ天神という百貨店のなかの書店でサイン会を行った時、隣が玩具売場だったこともあり、たぐさんの子供が集まっていました。これは読み聞かせだ」と書店の方に絵本をドサツと積んでもらって、その中から「三匹の子豚」と新美南吉の「赤いろうそく」を選びました。

「三匹の子豚」は僕が母にせがんで何度も読んでもらった本だったそうです。ふつう子供たちがいると騒ぐのですが、この時はシーンとして、気が付くと大人も物語の世界に入り込んでいた。そして読み終えた後、僕自身が清々しい気持ちになつていました。子供たちが「よかった」「また読んでね」と声をかけてくれた。大人もそうです。一人の中年女性が「実はとても嫌なことがあって落ち込んでいたのですが、聞いてくれるうちに元気ができました」と言ってくれました。

その時、絵本の読み聞かせは、こんな力もあるのか、凄く奥行きが広い世界なのかと驚き、これを続けていこうと、心に決めました。それから、妻と二人で子供たちが卒園した幼稚園から読み聞かせをはじめました。少しずつ読み聞かせの輪が広がり、翌年、「よい子に読み聞かせ隊」を結成、今は30人程になっていま

す。と言っても、規約も何もありませんが。片岡 読み聞かせでは、どんな絵本を読んでいるのでしょうか。志茂田 2000年に西宮市立河原橋小学校のPTAから「うちの小学校には5年前の阪神大震災で、園児だった子供がたくさんいて、その多くがPTSD(心的外傷後ストレス障害)に悩まされています。昼間、大型トラックの僅かな振動にもおびえて、とつさに近くにいる見ず知らずの大人にしがみつく。夜中にいきなり悲鳴を上げて飛び起きる子供がいくつもあります。そういう子供たちの心の癒しに、絵本の読み聞かせがならないでしょうか」と電話がありました。いつもやっているのは、何となく切ない可哀想な場面が出るものが多いので、明るい童話、面白い絵本にした方がいいのかとも考えたのですが、そういう先入観を持たずに普段やっていた通りにやることにしました。凄く泣いた子もたくさんいたのですが、読み聞かせが終わった後、そういう

子たちの中に、いつまでも僕らの周りから離れない子供たちがいました。この時、成功したと思いました。

よい子に読み聞かせ隊は「理屈とか関係なしに、物語の感動を通して、命がどんなに大切で、自分の命も、他人の命も、同じようにかけがいのないものなのか、そして生きることがどんなに素晴らしいことか、それが伝わる絵本を読み聞かせしよう」と方針が定まりました。

片岡 被災地や避難所を積極的に訪問されているそうですね。

志茂田 3・11の翌月には栃木県小山市県南体育館の避難所など3か所を回りま

